



S Y
E S A
研究エッセイ

ウイスキーと文化

ステファン・ブッヘンベルゲル（非文字資料研究センター 研究員）

非文字の文物と言え、まず絵、彫刻、神器などが思い浮かぶ。これらは人間の手でつくられた事物であるが、単なる実用品以上の価値があり、人間文化の発展を象徴し記録している。

さらに日常の用を足すための服、家具、乗り物、住居なども人間文化の発展を記録する。これらの事物はみな、目的に資するのみならず、常に、文化が展開する過程の一部でもあるからである。人類の発展は、文章や絵画によって記録され、同時に、例えば農具の変遷などによってもそれを跡付けることができるのである。

非文字文物の展開によって人類の文明を描く、実に革新的な試みが、トム・スタンデージの *A History of the World in Six Glasses*（原著 2006 年、新井崇嗣訳『世界を変えた 6 つの飲み物』2007 年インターシフト社）である。この本で著者は、世界史を 6 つの飲み物を通じて描いている。ビール、葡萄酒、茶、コーヒー、蒸留酒、ソフトドリンクである。これらの飲み物はすべて、歴史のゆくえの決定に関与してきたことから、非文字文化の卓越した例でもある。とりわけ私の研究上の関心は蒸留酒のなかのひとつの飲料に向けられている。ウイスキーである。そしてその歴史、その文化的記憶の担い手としての役割、その非文字文物としての側面である。

研究上とりわけ魅力的なのが、アメリカ英語の“Whiskey”ではなくて“Whisky”、つまりウイスキーのなかでもスコットランド製のものである。その理由は、長い伝統を有するからである。「スコットランド人はケチである」という典型と並んで良く知られているスコットランド文化の特徴の一つである。

ウイスキー好きにとっては、ウイスキーはシングルモルトに限る。100 パーセント大麦の麦芽でつくった「命の水」だ。

ウイスキーは飲んで純粋に楽しいうえに、既述のように文化的記憶の一部でもある。ウイスキーは、スコットランドの高地や、ロマンティックに美化された密造の光

景、密輸入、冷酷な税吏、時にはスコットランドの国民的作家ロバート・バーズさえ想起させるのである。特筆されるのは、滅んだ酒蔵のウイスキーが、失われた文化の代表となっていることである。

ウイスキーはとりわけ近年のブームのおかげでさまざまな文化活動の中心にもなっている。アイラ島のウイスキー・フェスティバル“Feis Ile”がその例である。毎年何千人もがスコットランド西部のこの小さな島を訪れ、酒蔵見学やウイスキー祭記念酒と、ウイスキーとは特に関係ない音楽、踊り、民謡を組み合わせたフェスティバルを楽しむのである。

ウイスキー自体のほか、瓶、グラス、樽、蒸留釜など、ウイスキーに関わるさまざまな文物が、歴史、とりわけスコットランドやヨーロッパの工業史を垣間見させてくれる。これを非常に自覚しているウイスキー産業も、おのれの歴史と伝統を強調する。ドイツの酒蔵“Whisky Agency”（ウイスキー・エージェンシー）の“Liquid Library”（リキッド・ライブラリー）というシリーズが一例である。シリーズの名称が、私の研究上の関心をかなりよく表している。液体の図書館が保存するのは、記録された文字ではなく、非文字の文物なのだ。

アイラの伝統ある酒蔵“Ardbeg”（アードベッグ）は、



図 1 Ardbeg（アードベッグ）社から限定発売されたウイスキー“GALILEO”